

一つの歴史、様々の歴史 ——「歴史の終わり」をめぐる——

岡本 充弘*

本論文はポストモダニズムという視点から歴史認識がどのように扱われるのかという問題を、イギリスの歴史理論家キース・ジェンキンスなどが提起している「歴史の終わり」という議論をふまえて考察している。とくに本稿が論じている問題は、脱構築論的な歴史の相対化論が、これまでの歴史、つまり近代国家のなかで形成されてきた国家や集団を単位とした歴史、それを批判するかたちで成立してきた学問的な歴史、とどのように対置されるのかという問題である。本稿の視点は、これまで伝統的な歴史学が批判しがちであったこうした議論が、けっして保守的な志向をもつものではなく、むしろ民主主義という近代の枠組を徹底するという視点からなされた、というものである。しかし、一方で歴史の相対化という問題は、歴史認識の基本的枠組であった事実性とか客観性ということをも相対化するものであり、ここから別の意味での議論が生ずることを本稿はあわせて議論している。

キーワード：歴史理論、近代歴史学、ポストモダニズム、脱構築論、物語論

—

イギリスの歴史理論家キース・ジェンキンスの著作『歴史を考えなおす』は、ポストモダニズムの立場に立つ脱構築論的な歴史理論についての議論を簡潔に整理した著作として、1991年に刊行されて以来版を重ねてきた (Jenkins 1991)。この著作は、2002年に改訂新判として装いを改めたが、そのさいにジェンキンスとならぶイギリスにおける歴史の脱構築論の擁護者であるアラン・マンズロウによる序文、およびジェンキンスとマンズロウの対談が新たに付された。この新判において興味深いことは、もちろん萌芽的にはそうした主張は既に旧版でも行なわれており、またその後の著作でも展開されていたが (Jenkins 1991, 1999)、新たにつけくわわったマンズロウとジェンキンスの対談のなかで、

*人間科学総合研究所所長・東洋大学文学部

「歴史の終わり」という問題が議論されていることである (Jenkins 2002)。

「歴史の終わり」という言葉がもちいられた例としてよく知られているのは、おそらくはフランシス・フクヤマによってもちいられた事例であろう。ロシア革命とそれ以降の社会主義国家群の形成によって新しい時代を指し示すかにみえた社会主義が、明確な失敗に終わったという時代的背景のなかで、コジェーブのヘーゲル解釈を援用しながら、自由民主主義（もちろん西欧的な、あるいはアメリカ的な）が歴史の発展の究極的な段階であり、その意味では既に「歴史の終わり」という時代に入ったという主張である (Fukuyama 1991)。

一時期それなりの関心を集めたといっても、多くの批判がそのことを指摘したように、この主張は、現存する資本主義的システムの擁護という点で、ある意味ではきわめてイデオロギー的なものであった。また理論的レベルという点からもけっして厳密なものではなかった。そもそも人類の歴史を、近代の出現以降わずかに数百年の時期で最終的なものとして停止させてしまうのは、あまりにも非論理的なものだろう。また自由主義とか民主主義といってもきわめて多義的な可能性をもつものであって、いま西洋やアメリカにある自由主義や民主主義がその最終的なものでもないことも、一定の批判的な意識さえもってれば、すぐに了解できることだからである。そうした問題意識を欠如させたフクヤマの議論が、議論としての有効性を失うのにさほどの時間は必要とされなかった。

言葉としては共通しているが、ジェンキンズやマンズロウはフクヤマの主張とはかなり異なった意味で「歴史の終わり」という言葉をもちいている。彼らはその内容を、「歴史の終わり」という章が独立した章として収められた『論文集—歴史の本質』という編著書のなかで、様々な論者の主張を紹介しながら具体的に明らかにしている。そこに収められているのは、それぞれの著書や論文から抜粋された十点の文章である。D・ロバーツ、スティードマン、J・スコット、フェルキ、アーマース、ハーラン、チャクラバルティ、リオタール、ボードリヤール、クラインが引用されているそれぞれの文章の筆者である (Jenkins & Munslow 2004)。

これらの十人の主張は、形而上学的な思考の後退とともに歴史もまた後退したとして、共有化された、客観的な歴史に対して、個人的な歴史、すなわち記憶の意味を論じたもの (ロバーツ)、歴史家は、彼らが史料の先にあるとしている事実の存在を論理的には証明しえない、という主張 (スティードマン)、歴史の断続性、固定しえない差異、解釈の相対性、といった問題を主張したもの (スコット)、たとえば性の問題にみられるように、様々な境界が曖昧化している現在における歴史の死と多様化の問題を論じたもの (フェルスキ)、近代が、継続性、一様性、全体性というものを基本として時間を中立的にとらえていることを批判し、時間の多様性、そのなかに生きている人々の多様性を論じたもの (アーマース)、客観性を重んずる社会科学的歴史に対して、現在の視点から歴史を倫理的、価値的にとらえることを主張したむしろ回帰的ともいえる主張 (ハーラン)、歴史を国民国家が作り出したものと、資本主義的な消費社会のなかで作り出されているものに区分けし、西欧社会では後者によって前者が死に追いやられていることを指摘しつつ、なお非西欧社会では前者のようなかたちで歴史が存在しうることを主張したもの (チャクラバルティ)、人類の普遍的な歴史、というようなメタナラ

ティヴへの批判(リオタール)、現代では、出来事はメディアをとおして伝えられることによって意味を与えられており、そうしたなかで歴史は情報システムに地位を譲り、実在的な歴史(real history)は仮想的な歴史(virtual history)にとって代わられている、ということを主張したもの(ボードリヤール)、歴史に対して記憶の問題がなぜ論じられるようになってきたのかという問題にふれたもの(クライン)、というように、その具体的主張の内容は幅広い範囲に及んでいる。

しかし、これらの主張は、基本的には脱構築論やポストモダニズムの流れに位置づけうるものであり、積極的に、あるいは潜在的なかたちで、「歴史の終わり」あるいは「歴史の死」という立場に立っているものである、とジェンキンスとマンズロウはみなしている。彼らによれば、これらの議論に共通してみられる視点は、「結合した一連の出来事の意味を理解するという意味で歴史を知ることの有用性」さらには「歴史を知ることの文化的必要性」になんらかのかたちで疑念を示している点にある、ということになる。

二

興味深い議論を展開しているこれらの論者たちの主張をさらに検討していくことは今後の課題とすることにして、本稿ではジェンキンスとマンズロウの問題意識を受けながら、彼らが今後の問題として提起している「歴史の終わり」という問題について、最近の日本でのいくつかの議論を取り入れながら、簡単な議論をすすめていきたい。まず、なぜジェンキンスとマンズロウが「歴史の終わり」という問題をことさらのものとして提起したのか、ということの意図ははっきりとしている。簡潔に言えば、それは彼らのいう「歴史」とは、「これまで」、とりわけ「近代」以降の社会において「行なわれてきた歴史」のことであり、そうした「歴史」を「終焉」させることが、現在では、彼らふうの言い方をすれば、現在の「ポストモダン」という時代にあっては必要である、ということである。

それでは「これまで行なわれてきた歴史」とはどのようなものかといえ、それは私たちが常識的に受け入れている歴史である。歴史は「過去の事実」を「再現」したものである、ということである。近代以降は、これにさらに「忠実に」という言葉が付け加えられている。史料を典拠として、史料考証・史料批判という手続きをへて過去の事実を歴史として表象するというのが、近代以降の歴史の基本的な枠組である。「そのままのものとしての歴史」を記す、という言葉に代表されるように、近代以降の社会において歴史記述においてもっとも基本的なこととされてきたのは、信用することのできる史料の厳密な分析による過去の事実の忠実な再現である。したがって、そうしたなかでは歴史は、歴史学、あるいは歴史科学、という言葉でも呼ばれるものともなった。ここでは歴史は、過去の事実に対応するものと考えられている。

しかし、『歴史を脱構築する』と題された著作のなかでマンズロウが指摘しているように、このように「過去の事実」を忠実に再現したものが歴史であるという考え方、「再構築論」は、現在では一つの批判の対象となっている(Munslow 1997)。現在ではむしろ「過去の事実」を現代的な問題関心や、あるいは適切な概念や理論をもちいて説明するという「構築論」的な歴史が、とりわけ歴史研究の場

では重視されているからである。しかし、いずれにせよ、再構築論にしても、構築論にしても、自らが語る歴史は、過去の事実に対応するものであるということを否定する立場には立ってはいない。それらはともに、自らの歴史を客観的な、実証的な方法に基づくものであると考えている (Munslow 1997, 2003)。

ジェンキンズやマンズロウが批判しようとしているのは、現在の歴史に対しなお根強い影響力を行使している上述のような歴史の再構築論、構築論という立場である。その批判の根拠としてもちいられているのが、いわゆるポストモダニズムという思想的流れのなかから登場してきたいくつかの理論的な思考である。その一つは、いわゆる脱構築論である。とりわけソシュールの言語理論にはじまり、その後バルトやデリダによって展開されてきた議論、すなわち言語と言語によって表されるもの、彼らの言葉を借りれば、記号表現と記号内容は必ずしも一致するものではなく、したがって言語によって構成されたテキストは、いかなる意味でも実在を正確に反映するものではない、という主張である (Saussure 1922, Barts 1961~1971, Derrida 1967)。

この脱構築論の主張が歴史に応用されるならば、過去の事実の再現という意味での歴史の成立は、きわめて困難なものとなる。なぜなら、歴史の再現のためにもちいられている史料は、いかなるものでも過去そのものではなく、過去の断片を示す記号でしかないからである。同じように、それらをもとに書かれた歴史は、いかなる意味でもテキストでしかなく、過去の事実ではありえないからである。こうした脱構築論やテキスト論の主張にしたがえば、歴史の研究がすすみ、たとえ多くの歴史書が書かれたとしても、私たちは過去の実在を再現しているわけではなく、新たな表象やテキストを繰り返し生産しつづけているのに過ぎないことになる。

この議論と重なる点もあるが、ジェンキンズとマンズロウが再構築論的・構築論的歴史を批判するもう一つの根拠としているのは、物語論という議論である。もちろん、過去にストーリーを与えるという形式は、人間の社会の中では古くから存在していたことであった。しばしば指摘されるように、歴史 (ヒストリー) という言葉と、物語 (ストーリー) という言葉が、同一の語源に由来するということは、そのことの一つの証左である。事実、古来過去をとりあつかった書物は、伝説や神話はもとより、歴史書という体裁をとったものの多くも、なんらかのかたちのストーリーをそのなかに内包していた。そのことはその時代にあってはごく当然のこととして受け入れられていた。

しかし、厳密に考えればわかるように、その多くがストーリーをもつものとして語られていた、あるいはいまなお語られている歴史は、テキストではあっても過去実在と同一のものではありえない。なによりも過去実在は、けっしてストーリーをもつものとして存在してはいなかったからである。過去にストーリーのある歴史という形式を与えているのは、歴史家の方であり過去の方ではない。もちろんこうした問題についての議論は存在しているが、ジェンキンズとマンズロウはこうした物語論の基本的な主張を「これまでの歴史」を批判する材料としてもちいている。なかでも彼らが依拠している議論の一つは、既に紹介した論文のなかで、「歴史の終わり」論の論者の一人としてもあげられているリオタールの議論である。彼らが論拠としているのは、巨大な物語 (メタナラティブ)、簡潔に

言えば発展や進歩という枠組を基軸とするおおきな物語が、近代においては権力や抑圧を生み出す言説として機能してきたという主張である (Lyotard 1979, 1986)。

またとくにジェンキンズが自らの主張を擁護するためにもちいているもう一つの議論が、ヘイドン・ホワイトで議論である。よく知られているようにホワイトの基本的な主張は、あらゆる歴史は結局は一定の立場から書かれたものであり、それを具体的に論じていくためのストーリーをもち、そしてそれを最も適切に示すためになんらかの喩法をもちいている、というものである。その意味で歴史は、文学ときわめて共通した形式をもっているという主張である (White 1973)。そしてまたここからホワイトが引き出したもう一つの重要な主張は、アウシュヴィッツに関わる歴史叙述をめぐるギンズブルグらとの論争に示されることになるような、歴史認識の徹底した相対性ということである (White 1992)。

三

それではジェンキンズやマンズロウがなぜこうした議論を援用しながら、相対主義的な視点に立ち、これまでの「歴史の終わり」という問題を主張しているのかというと、その理由は一言でいえば、歴史が一つのものとして共有されることに対する批判である。もっともジェンキンズ自身は「ポストモダンの世界」あるいは「より民主主義的なコンテクスト」のなかで必要とされる歴史、という言い方をしているが、筆者はそこに含意されていることは、その多くがストーリーというかたちをもつ歴史を一つのものとして共有しつづけることへの批判であると考えている。

おそらく一つの歴史という言葉で私たちがまずイメージするのは、国家が私たちに強いている歴史であろう。とりわけ近代以降の世界にあって、最も有力な権力として機能してきた国民国家が、それまでの神話や伝説、あるいは様々の物語の助けを借りて発明し、それを教育をはじめとする様々な媒体をとおして「国民」に強いてきた歴史である。

こうした「国民」の一つの歴史に対しての批判は、けっして少なくはない。とりわけ多くの専門的な歴史研究者は、国家が国民に強いようとしている、その意味ではイデオロギー的な歴史を批判するということが自らの立場であると、考えてきた。権力が強いようとするイデオロギー的な歴史に対し、自らは厳密な考証に基づき、客観的な、科学的な歴史を作り出すというのがその基本的立場であった。

しかし、批判が行なわれているからといって、国民の間で歴史が一つのものとして存在していないわけではない。それどころか、一つの歴史は国民の間で意外な形で存在している。例をあげてみよう。たとえば織田信長である。あるいは近藤勇でもかまわない。多くの日本人は織田信長や近藤勇の名前を知っている。織田信長や近藤勇という歴史上の人物についてについての知識を、少なくともその名前くらいは、日本人は知識として共有している。しかし、もちろんイギリス人は共有していないし、フランス人も知らない。織田信長や近藤勇についての知識は、日本人だけが共有する知識である。

しかし、日本人が織田信長や近藤勇を知識として共有しているということは、どういうことを意味しているのだろうか。それは信長が教科書で教えられているからでも、織田信長への歴史研究が他に

比べて著しく進んでいるからでもない（近藤勇は教科書には登場しない）。異論があるかも知れないが、やや極論となるが織田信長や近藤勇がとりたてて歴史のなかで重要な役割を果たしたからでもない。そうではなくて、織田信長や近藤勇を共通の歴史の知識とする空間が、現時点で私たちの「歴史という言葉空間」のなかに存在しているからなのである。

そもそも織田信長や近藤勇は私たちの一人一人にとってどのような意味をもっているのだろうか。たとえば私たちの祖先（の幾人か）が一向宗の信者であったとするなら、織田信長はその祖先たちに苛酷な弾圧を加えた人物である。かりに私たちの祖先の一つの系譜をたまたま織田信長にたどれるとしても、実際には私たちの祖先の圧倒的な多数の系譜は、独善的な支配者ではなく、その時代に平凡に生きていた民百姓へと向かうはずである。なぜ私たちはこの時代の私たちの歴史を、そうした人々への関心へと向けず、織田信長のような特定の人物へと帰し、それを私たちの間で一つのものとして共有しているのだろうか。同じように、もちろん人それぞれではあるけれど、幕末期にたどることができる私たちの直接の祖先の圧倒的多数の系譜は、西郷隆盛でもなければ、近藤勇でもなく、また尊皇派の志士でもなく、佐幕派の武士でもなく、その両者のはざまでおそらくは平凡に生きていた普通の人々に遡るはずである。そのことは百年前の時代に関しても同じことである。百年前というのは、私たちの曾祖父母が生きていた時代である。明治天皇だけが生きていた時代ではない。なぜ過去の記憶はそうした直接個人個人に関わるものとして維持されていないのだろうか。なぜ明治天皇という一つの事実が歴史として、その認識だけが日本人という単位に強いられているのだろうか。

ここで注意しなければならないことは、こうした一つの歴史、共有されている歴史というものが、国家が国民に強いるものに、とどまっていないということである。それ以上に重要なことは、近代以降小説や神話と区別されるものとして、史料を典拠として過去の事実を再構成したものであるとされてきた歴史もまた、歴史の共有ということに重要な役割を果たしてきたということである。いかに恣意的な歴史であっても、その多くは学問的な外皮を同時にまとっていたことは事実である。またそうした恣意的な歴史を批判した歴史もまた、その語るところのものを厳密な史料に基づく客観的な事実であるとして人々にその共有を強いてきた。それらは、神話や伝説を事実に基づかないものとして排斥し、また同じく歴史小説を実証することのできない想像を交えたものとして自らとは区別したけれど、既に述べたような批判が提示されるまでは、自らが作り出している歴史が、過去の事実と厳密な意味で対応しているのかということをおぼろげに自省することは少なかった。また自らが語るものが、なおストーリーをもつとして、あるいはある特定のストーリーのコンテキストのなかに位置するものとして存在している、ということをおぼろげに自省することもほとんどなかった。

四

以上のような一つの歴史、共有される歴史というものがなぜ批判されなければならないのかといえ、その理由はフーコーの言葉を借りるまでもなく、知の権力性というところにある（Foucault 1977, 1980, Ball 1990）。歴史という知が、その形態がいかなるものであるにせよ、現在では（もちろん伝統

的にも) 権力との関わりあいにおいて存在しているからである。したがって論理的には、こうした知の形態に対しては、個人個人によって異なってもよい知としての歴史、永遠に不定形の歴史が対置される。歴史は無限に多様で相対的なものであってのよいとされる。当然のことながらこうした主張は、これまで歴史として存在してきた知識の根拠を危ういものとする。それは恣意的なイデオロギーとしての歴史ばかりでなく、一定の共通の方法に基づいて確立されたという点で、共通して事実としてよいとされてきたもの、つまり学問、あるいは科学としての歴史ということをも論理的には否定する可能性をもっている。

ポストモダニズム的な視点にたつ歴史理論のなかで、とりわけジェンキンスの議論が多くの歴史家から批判を浴びているのもこのためである。というのは、ジェンキンスの議論はこうした論理的可能性をあえて否定しようとはしていないところへと向かっているからである。たとえばポストモダニズムの歴史理論を批判する著作を書いたウィリー・トムプソンは、徹底的な相対主義の立場に立つジェンキンスの議論は、ホロコーストの実在をも否定する議論である、としてジェンキンスを批判している(Thompson 2004)。そうした批判をまつまでもなく、既にふれたようなアウシュヴィッツをめぐるヘイドン・ホワイトの議論、湾岸戦争をめぐるボードリヤールの議論は、相対主義的な立場が徹底されれば、確たる事実(とされているもの)までもが、(論理的には)疑いの対象となり、また確たる意味をもちえない、とも論じている(Baudrillard 1991)。その意味ではこのような相対主義は、ホロコーストの否在論に代表されるような、いわゆる歴史修正主義にその根拠を与えるものである、という批判がしばしば行なわれている(Evans 1997)。

そうした批判はたしかに坂本多加雄の議論にはあてはまる。坂本は、国家というものは構築されたものであり、歴史もまた国家が構築される過程で構築されたものであると主張する。もちろんここで坂本がもちいている構築という言葉の意味は、マンスロウが脱構築論と対比するかたちであくまでも実証をその中心におくものとしている歴史の構築論とは同意ではなく、むしろ人為的な要素を重視する社会構成主義とか社会構築論として語られている意味である。坂本はそうした議論を論拠として、構築される歴史は相対的なものであってよいと主張する。そこから国民や国家によって歴史が異なるのは当然であり、南京虐殺事件や従軍慰安婦が事実であったとしても、それを日本における歴史の教育にあえて取り上げる必要はないと主張する。ここでは歴史の相対論は、多くのポストモダニトの主張とは異なって、国家主義的な歴史へと先祖帰りをしている(坂本 1998, 2001)。

その意味では自らがデリダの紹介者でもある高橋哲哉をはじめとして多くの論者が、坂本の議論を構築主義を恣意的に歪曲したものとして批判したことは、批判としては誤ってはいない(高橋 1995, 1999, 2001, 2002)。しかし、その高橋の主張に対して寄せられた批判として、注目しなければならないものは、やはり構築主義をその議論の論拠とした上野千鶴子の批判だろう。というのは、上野の思想的(政治的)立場と批判の意味は、まさに権力的な言説の補完物でしかない坂本のものとはまったく異なるものだからである。

よく知られているように、上野は従軍慰安婦の問題を例にとって、兵士と慰安婦は同じ事件につい

て異なった記憶を持っていると主張した。両者の記憶はけっしてまじりあうことはなく、そのどちらが正しいかということは意味をもたない。高橋のように、日本人は南京虐殺事件や従軍慰安婦事件への記憶を一つのものとしてもちつづけるべきだと語りかけることは、「歴史」とか「記憶」という場、ことさらに「日本人」という単位をもちだすことであり、それは結局はナショナリズムを裏返しにしたものにすぎないというのが上野の高橋への批判である（上野 1998）。

この批判は論理的には正しい。そしてある意味では本稿で論じてきたような議論とも重なり合っている。しかし、こうした議論が論理的に絶対的な優位さをもっているかという点、そこにもまた一つのおおきな問題が存在している。そうした問題を説明するために、具体的な例をあげてみよう。それは2004年夏の一つの事件である。中国で行われたサッカーのアジアカップの試合会場において、日本チームに対して激しいブーイングが行われたという事件である。この事件が起きたのは、戦前の日本の侵略の記憶が残存し、60年を経た今日、それが歴史として増幅されていたためである。そうした記憶をほとんど忘却していた日本人にとっては、とりわけ日本の若者にとっては、事件はきわめておおきな違和感を抱かせるものであった。そして日本のメディアは、そうした記憶を保持しつづけている中国側に、むしろ事態を引き起こした責任があるように報じた。歴史認識が相対的なものであるのなら、歴史への知識をもちつづけている側こそ誤っているのであり、歴史への知識をもっていない自らのほうが正しい、公平な立場に立っている、と日本では論じられたのである。

五

以上ジェンキンスとマンスロウが提起した「歴史の終わり」という問題を手がかりに、いくつかの角度から共通の歴史、相対主義的な歴史、という問題を検討してみた。これまでの議論からも理解できるように、「歴史の終わり」という議論は、特定の言説空間において共有されてきた歴史への批判を目指すものである。そのもっともおおきな空間が、おそらくは近代であり、それに続くものが国家であるということである。もちろんそうした言説空間は、近代とか、国家に限られるものではなく、多様なかたちで私たちの周囲に存在しているものでもある。

そうした空間が生み出している歴史に対して、彼らは徹底した相対主義的な歴史を主張している。というのは、歴史がそのようなかたちで相対化されること、一人一人が過去をそれぞれ異なったものとして、別の言葉でいえば、自らのものとして認識することが、民主主義的な社会にとっては必要なことであり、人々を解放へと導くことになるからである。

歴史家からは批判されることの多いヘイドン・ホワイトの歴史＝物語論、正確に言えば近代以降の歴史もまた文学と共通する性格をもち続けているという議論に、彼らが、とりわけジェンキンスが、共感を示したのもそのためである。なぜなら、私たちが「読者」という立場に立てばすぐに理解できるように、文学は、それがいかなるものであっても、基本的には私たちを強制するものではない。作者と読者の関係は平等であり、読者は好きなように作品を選び、それを楽しめばよいだけだからである。しかし、歴史と私たちの関係はそうした平等のものとしては成り立ってはいない。恣意的な歴史

も、あるいは科学的な歴史も、私たちには強制関係をもつものとして存在している。国家は私たちに国民であるための歴史を強制し、歴史家たちは自らが語る事実は客観的な過去の真実であるとして、その認識を私たちに強いている。厳密に言えば彼らの作り出している歴史が過去実在と一致するものであることが論証できていないにもかかわらず、彼らは過去実在とは異なる物語のなかで語られる歴史を私たちに強いている。

こうしたことへの疑いが「歴史の終わり」という考えの根拠となっている。フーコーはいうまでもなく、リオタルにしても、彼らがそれまでの歴史に疑問を抱いた最大の理由は、それが進歩とか、科学を標榜しながら、実際には新しい権力的な言説の一つを構成しているのではないのか、という疑問であった。こうした問いの延長に成立したのが、「歴史の終わり」という議論である。なんらかのかたちで私たちが拘束してきた知識から自由になる、つまり私たちがこれまで拘束してきた歴史を全面的に解体することが、自由な考えを人々の間に生み出し、社会の解放をもたらすのではないかという議論である。

しかし、最後に結論的に言うならば、本稿のなかでもふれたように、こうした歴史の徹底した相対化論は、いっぽうではホロコースト、南京虐殺事件に関してさえも、その事実性の相対化、あるいは事件に対する記憶の共有化の否定、という問題を生み出している。そのことがそうした主張の本来的急進性とは裏腹に、保守的な主張と論理的な共通性をもっていることも事実である。おそらくこうした問題を論理的にどのように考えていくかは、私たちにとって深刻な課題のはずである。しかし、本稿を終えるにあたってあらためて強調したいことは、歴史というのは、本来的には、あるいはありうべき民主主義というコンテクストのなかでは、共有を強いられるものではなく、個人個人が既に実在していない過去（それは自らにとってのものでも、帰属する集団にとってのものでもよいが）をどのように認識しているのか、あるいはそれを認識するにはどのような手続きをとればよいのか、というものはずである。一人一人がそれぞれ様々なかたちで存在しているように、歴史もまた一人一人によって異なるはずである。すべての人が共通の曾祖父母を持っているわけではない。彼らのアイデンティの根源にある百年前の歴史は、あるいはそれ以前の歴史、それ以後の歴史は、それぞれの人々によって異なっている。共有されるべき歴史というものは、そうしたことを前提としたときにはじめて、次の問題として語りうるものだろう。

引用・参考文献

- Ball, Stephen J. (ed.) (1990) *Foucault and Education — Discipline and Knowledge*, London: Routledge. (S・J・ボール編著・稲垣恭子、喜名信之、山本雄二訳『フーコーと教育—〈知=権力〉の解説』勁草書房、1999年)
- Bartes, Roland (1961-1971) Introduction a L'analyse structurale des récits, *Communications*, 8, novembre 1966 *et al.* (ロラン・バルト著、花輪光訳『物語の構造分析』みすず書房、1979年)
- Baudrillard, Jean (1991) *La guerre du Golfe n'a pas en lieu*, Paris: Editions Galilée (ジャン・ボードリヤール著、塚原史訳『湾岸戦争は起こらなかった』紀伊国屋書店、1991年)
- Derrida, Jacques (1967) *L'écriture et la différence*, Paris: Edition du Seuil. (ジャック・デリダ著、若桑毅他訳『エクリチュールと差異』法政大学出版局、1977年)

- Evans, Richard (1997) *In Defence of History*, London: Granta. (リチャード・エヴァンズ著、今関恒夫・林以知郎監訳『歴史学の擁護—ポストモダニズムとの対話』晃洋書房、1999年)
- Foucault, Michel (1977) 'Vérité et pouvoir', *L'arc*, no.70, 1977, (1980) 'Table ronde du mai 1978. Débat avec Michel Foucault' in M.Perrot et al., *L'impossible prison*, Paris: Edition le Seuil. (桑田禮彰、福井憲彦、山本哲士編『ミシェル・フーコー1926～1984—権力・知・歴史』新評論、1984年)
- Fukuyam, Francis (1991) *The End of History and the Last Man*, New York: Avon Books. (フランシス・フクヤマ著、渡部昇一訳『歴史の終わり』上・下、三笠書房、1992年)
- Jenkins, Keith ([1991] 2002) *Rethinking History*, London: Routledge.
- Jenkins, Keith (1999) *Why History? Reflection on the Possible End of History and Ethics Under the Impact of the Postmodern*, London, Routledge.
- Jenkins, Keith & Munslow, Alun (ed.) (2004) *The Nature of History Reader*, London: Routledge.
- Liotard, Jean François (1979) *La condition postmoderne: rapport sur le pouvoir*, Paris: Edition de Minuit. (ジャン・フランソワ・リオタル著、小林康夫訳『ポストモダンの条件』水声社、1986年)
- Liotard, Jean Francois (1986) *Le postmoderne expliqué aux enfants*, Paris; Edition Galilée. (ジャン・フランソワ・リオタル著、菅啓次郎訳『こどもたちに語るポストモダン』筑摩書房、1998年)
- Munslow, Alun (1997) *Deconstructing History*, London: Routledge.
- Munslow, Alun (2003) *The New History*, London: Longman.
- Saussure, Ferdinand de (1922) *Cours de linguistique générale*, Paris: Payot. (フェルディナン・ソシュール著・小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店、1972年)
- Thompson, Willie (2004) *Postmodernism and History*, Hampshire: Palgrave Macmillan.
- White, Hayden (1973) *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth Century Europe*, Baltimore: The John Hopkins University Press.
- White, Hayden (1992) 'Historical Emplotment and the Problem of Truth', in Saul Friedlander (ed.), *Probing the Limits of Representation*, Cambridge, MA: Harvard University Press, pp.37-53. (ヘイドン・ホワイト「歴史のプロット化と真実の問題」フリードランダー編・上村忠男他訳『アウシュヴィッツの表象と限界』未来社、1994年、57～89頁)
- 上野千鶴子 (1998) 『ナショナリズムとジェンダー』青土社
- 坂本多加雄 (1998) 『歴史教育を考える』PHP 研究所
- 坂本多加雄 (2001) 『問われる日本人の歴史感覚』勁草書房
- 高橋哲哉 (1995) 『記憶のエチカ』岩波書店
- 高橋哲哉 (1999) 『戦後責任論』講談社
- 高橋哲哉 (2001) 『歴史／修正主義』岩波書店
- 高橋哲哉編 (2002) 『〈歴史認識〉論争』作品社

History, Shared or Privatized ? —— on ‘the Death of History’ ——

OKAMOTO Michihiro*

Keith Jenkins and Alun Munslow, the English theorists of history, took up the problem of ‘the end of history’ as an independent chapter in their recent work, ‘The Nature of History Reader’. Why do they think history should end? It is because they think history in modernity is a discourse to subjugate peoples. Both histories, the one invented by the modern nation states and the other maintained by professional historians as a discipline, force us to accept their discourses about the past. Though their points of view seem to differ fundamentally, they are similar in terms of their oppressiveness. Jenkins and Munslow argue that for this reason not only have we to get rid of such histories, but also to live in an age without history. Of course this relativistic viewpoint causes some problems. No history means no past. At the same time we can remake any history as we like. History would be written and rewritten quite arbitrarily without any principles. Even the Holocaust would disappear from our mind. Arguably a world without history would be emancipating, but it cannot be denied that such a world might well be devastating. Which world should we take in the postmodern world? This article discusses this problem and makes a suggestion concerning this choice.

Key words : postmodernism, theory of history, modern historiography, deconstruction, narrative

* A professor in the Faculty of Literature, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University